狼森と笊森、盗森

宮沢賢治

小岩井農場の北に、黒い松の森が四つあります。いちばん南が狼森（オイノもり）で、その次が笊森（ざるもり）、次は黒坂森、北のはずれは盗森（ぬすともり）です。

この森がいつごろどうしてできたのか、どうしてこんな奇体（きたい）な名前がついたのか、それをいちばんはじめから、すっかり知っているものは、おれ一人だと黒坂森のまんなかの巨（おお）きな巌（いわ）が、ある日、威張（いば）ってこのおはなしをわたくしに聞かせました。

ずうっと昔（むかし）、岩手山が、何べんも噴火（ふんか）しました。その灰でそこらはすっかり埋（うず）まりました。このまっ黒な巨きな巌も、やっぱり山からはね飛ばされて、今のと

ころに落ちて来たのだそうです。

　噴火がやっとしずまると、野原や丘（おか）には、穂（ほ）のある草や穂のない草が、南の方からだんだん生えて、とうとうそこらいっぱいになり、それから柏（かしわ）や松（まつ）も生え出し、しまいに、いまの四（よ）つの森ができました。けれども森にはまだ名前もなく、めいめい勝手に、おれはおれだと思っているだけでした。するとある年の秋、水のようにつめたいすきとおる風が、柏の枯（か）れ葉をさらさら鳴らし、岩手山の銀の冠（かんむり）には、雲の影（かげ）がくっきり黒くうつっている日でした。

　四人の、けらを着た百姓（ひゃくしょう）たちが、山刀（なた）や三本鍬（さんぼんぐわ）や

唐鍬(とうぐわ)や、すべて山と野原の武器を堅(かた)くからだにしばりつけて、東の稜(かど)ばった燧石(ひうちいし)の山を越(こ)えて、のっしのっしと、この森にかこまれた小さな野原にやって来ました。よくみるとみんな大きな刀もさしていたのです。

先頭の百姓が、そこらの幻燈(げんとう)のようなけしきを、みんなにあちこち指さして

「どうだ。いいとこだろう。畑はすぐ起せるし、森は近いし、きれいな水もながれている。それに日あたりもいい。どうだ、俺(おれ)はもう早くから、ここと決めて置いたんだ。」と云(い)いますと、一人の百姓は、

「しかし地味(ちみ)はどうかな。」と言いながら、屈(かが)んで一本

のすすきを引き抜いて、その根から土を掌にふるい落して、しばらく指でこねたり、ちょっと嘗めてみたりしてから云いました。
「うん。地味もひどくよくはないが、またひどく悪くもないな。」
「さあ、それではいよいよこときめるか。」
も一人が、なつかしそうにあたりを見まわしながら云いました。
「よし、そう決めよう。」いままでだまって立っていた、四人目の百姓が云いました。
四人はそこでよろこんで、せなかの荷物をどしんと

おろして、それから来た方へ向いて、高く叫(さけ)びました。

「おおい、おおい。ここだぞ。早く来(こ)お。早く来お。」

するとすすきの中から、荷物をたくさんしょって、顔をまっかにしておかみさんたちが三人出て来ました。見ると、五つ六(む)つより下の子供が九(く)人、わいわい云いながら走ってついて来るのでした。

そこで四人(よったり)の男たちは、てんでにすきな方へ向いて、声を揃(そろ)えて叫びました。

「ここへ畑起してもいいかあ。」

「いいぞお。」森が一斉(いっせい)にこたえました。

みんなは又(また)叫びました。

「ここに家建ててもいいかあ。」
「ようし。」森は一ぺんにこたえました。
みんなはまた声をそろえてたずねました。
「ここで火たいてもいいかあ。」
「いいぞお。」森は一ぺんにこたえました。
みんなはまた叫びました。
「すこし木貰(きいもら)ってもいいかあ。」
「ようし。」森は一斉にこたえました。
男たちはよろこんで手をたたき、さっきから顔色を変えて、しんとして居た女やこどもらは、にわかにはしゃぎだして、子供らはうれしまぎれに喧嘩(けんか)をしたり、

女たちはその子をぽかぽか撲ったりしました。

その日、晩方までには、もう萱をかぶせた小さな丸太の小屋が出来ていました。子供たちは、よろこんでそのまわりを飛んだりはねたりしました。次の日から、森はその人たちのきちがいのようになって、働らいているのを見ました。男はみんな鍬をピカリピカリさせて、野原の草を起しました。女たちは、まだ栗鼠や野鼠に持って行かれない栗の実を集めたり、松を伐って薪をつくったりしました。そしてまもなく、いちめんの雪が来たのです。

その人たちのために、森は冬のあいだ、一生懸命、

北からの風を防いでやりました。それでも、小さなこどもらは寒がって、赤くはれた小さな手を、自分の咽喉（のど）にあてながら、「冷たい、冷たい。」と云ってよく泣きました。

　春になって、小屋が二つになりました。そして蕎麦（そば）と稗（ひえ）とが播（ま）かれたようでした。そばには白い花が咲き、稗は黒い穂を出しました。その年の秋、穀物がとにかくみのり、新らしい畑がふえ、小屋が三（み）つになったとき、みんなはあまり嬉（うれ）しくて大人までがはね歩きました。ところが、土の堅く凍（こお）った朝でした。九人のこどもらのなかの、小さな四人がどうしたのか

夜の間に見えなくなっていたのです。

みんなはまるで、気違(きちが)いのようになって、その辺をあちこちさがしましたが、こどもらの影(かげ)も見えませんでした。

そこでみんなは、てんでにすきな方へ向いて、一緒(いっしょ)に叫びました。

「たれか童(わらし)やど知らないか。」

「しらない」と森は一斉にこたえました。

「そんだらさがしに行くぞお。」とみんなはまた叫びました。

「来お。」と森は一斉にこたえました。

そこでみんなは色々の農具をもって、まず一番ちかい狼森(オイノもり)に行きました。森へ入りますと、すぐしめったつめたい風と朽葉(くちば)の匂(におい)とが、すっとみんなを襲(おそ)いました。

みんなはどんどん踏(ふ)みこんで行きました。

すると森の奥(おく)の方で何かパチパチ音がしました。

急いでそっちへ行って見ますと、すきとおったばら色の火がどんどん燃えていて、狼(オイノ)が九疋(くひき)、くるくるくるくる、火のまわりを踊(おど)ってかけ歩いているのでした。

だんだん近くへ行って見ると居なくなった子供らは四人共、その火に向いて焼いた栗や初茸(はったけ)などをたべて

いました。
狼はみんな歌を歌って、夏のまわり燈籠（とうろう）のように、火のまわりを走っていました。
「狼森のまんなかで、
　火はどろどろぱちぱち
　火はどろどろぱちぱち、
　栗はころころぱちぱち、
　栗はころころぱちぱち。」
みんなはそこで、声をそろえて叫びました。
「狼どの狼どの、童（わら）しゃど返して呉（け）ろ。」
狼はみんなびっくりして、一ぺんに歌をやめてくち

をまげて、みんなの方をふり向きました。

　すると火が急に消えて、そこらはにわかに青くしいんとなってしまったので火のそばのこどもらはわぁと泣き出しました。

　狼は、どうしたらいいか困ったというようにしばらくきょろきょろしていましたが、とうとうみんないちどに森のもっと奥の方へ逃(に)げて行きました。

　そこでみんなは、子供らの手を引いて、森を出ようとしました。すると森の奥の方で狼どもが、

「悪く思わないで呉ろ。栗だのきのこだの、うんとご馳走(ちそう)したぞ。」と叫ぶのがきこえました。みんなはう

ちに帰ってから粟餅(あわもち)をこしらえてお礼に狼森へ置いて来ました。

春になりました。そして子供が十一人になりました。馬が二疋来ました。畠(はたけ)には、草や腐(くさ)った木の葉が、馬の肥(こえ)と一緒に入りましたので、粟や稗はまっさおに延びました。

そして実もよくとれたのです。秋の末のみんなのよろこびようといったらありませんでした。

ところが、ある霜柱(しもばしら)のたったつめたい朝でした。

みんなは、今年も野原を起して、畠をひろげていましたので、その朝も仕事に出ようとして農具をさがし

ますと、どこの家(うち)にも山刀(なた)も三本鍬(さんぼんぐわ)も唐鍬(とうぐわ)も一つもありませんでした。

みんなは一生懸命そこらをさがしましたが、どうしても見附(みつ)かりませんでした。それで仕方なく、めいめいすきな方へ向いて、いっしょにたかく叫びました。

「おらの道具知らないかあ。」

「知らないぞお。」と森は一ぺんにこたえました。

「さがしに行くぞお。」とみんなは叫びました。

「来お。」と森は一斉に答えました。

みんなは、こんどはなんにももたないで、ぞろぞろ森の方へ行きました。はじめはまず一番近い狼森(オイノもり)に

行きました。
すると、すぐ狼(オイノ)が九疋(くひき)出て来て、みんなまじめな顔をして、手をせわしくふって云いました。
「無い、無い、決して無い、無い。外(ほか)をさがして無かったら、もう一ぺんおいで。」
みんなは、尤(もっと)もだと思って、それから西の方の笊森(ざるもり)に行きました。そしてだんだん森の奥へ入って行きますと、一本の古い柏(かしわ)の木の下に、木の枝(えだ)であんだ大きな笊が伏(ふ)せてありました。
「こいつはどうもあやしいぞ。笊森の笊はもっともだが、中には何があるかわからない。一つあけて見よ

う。」と云いながらそれをあけて見ますと、中には無くなった農具が九つとも、ちゃんとはいっていました。それどころではなく、まんなかには、黄金(きん)色の目をした、顔のまっかな山男が、あぐらをかいて座(すわ)っていました。そしてみんなを見ると、大きな口をあけてバアと云いました。

子供らは叫んで逃げ出そうとしましたが、大人はびくともしないで、声をそろえて云いました。

「山男、これからいたずら止(や)めて呉(け)ろよ。くれぐれ頼(たの)むぞ、これからいたずら止めで呉ろよ。」

山男は、大へん恐縮(きょうしゅく)したように、頭をかいて立っ

て居(お)りました。みんなはてんでに、自分の農具を取って、森を出て行こうとしました。

すると森の中で、さっきの山男が、

「おらさも粟餅持って来て呉ろよ。」と叫んでくるりと向うを向いて、手で頭をかくして、森のもっと奥へ走って行きました。

みんなはあっはあっはと笑って、うちへ帰りました。そして又(また)粟餅をこしらえて、狼森と笊森に持って行って置いてきました。

次の年の夏になりました。平らな処(ところ)はもうみんな畑です。うちには木小屋がついたり、大きな納屋(なや)が出

来たりしました。

それから馬も三疋になりました。その秋のとりいれのみんなの悦(よろこ)びは、とても大へんなものでした。

今年こそは、どんな大きな粟餅をこさえても、大丈夫(だいじょうぶ)だとおもったのです。

そこで、やっぱり不思議なことが起りました。

ある霜の一面に置いた朝納屋のなかの粟が、みんな無くなっていました。みんなはまるで気が気でなく、一生けん命、その辺をかけまわりましたが、どこにも粟は、一粒(ひとつぶ)もこぼれていませんでした。

みんなはがっかりして、てんでにすきな方へ向いて

叫(さけ)びました。
「おらの粟知らないかぁ。」
「知らないぞお。」森は一ぺんにこたえました。
「さがしに行くぞ。」とみんなは叫びました。
「来お。」と森は一斉(いっせい)にこたえました。
みんなは、てんでにすきなえ物を持って、まず手近の狼森(オイノもり)に行きました。
　狼(オイノ)共は九疋共もう出て待っていました。そしてみんなを見て、フッと笑って云(い)いました。
「今日も粟餅だ。ここには粟なんか無い、無い、決して無い。ほかをさがしてもなかったらまたここへおい

で。」

　みんなはもっともと思って、そこを引きあげて、今度は笊森へ行きました。

　すると赤つらの山男は、もう森の入口に出ていて、にやにや笑って云いました。

「あわもちだ。あわもちだ。おらはなっても取らないよ。栗をさがすなら、もっと北に行って見たらよかべ。」

　そこでみんなは、もっともだと思って、こんどは北の黒坂森、すなわちこのはなしを私に聞かせた森の、入口に来て云いました。

「粟を返して呉(け)ろ。粟を返して呉ろ。」

黒坂森は形を出さないで、声だけでこたえました。

「おれはあけ方、まっ黒な大きな足が、空を北へとんで行くのを見た。もう少し北の方へ行って見ろ。」そして粟餅のことなどは、一言も云わなかったそうです。そして全くその通りだったろうと私も思います。なぜなら、この森が私へこの話をしたあとで、私は財布(さいふ)からありっきりの銅貨を七銭(しちせん)出して、お礼にやったのでしたが、この森は仲々受け取りませんでした、この位気性がさっぱりとしていますから。

さてみんなは黒坂森の云うことが尤(もっと)もだと思って、

もう少し北へ行きました。

それこそは、松のまっ黒な盗森(ぬすともり)でした。ですからみんなも、

「名からしてぬすと臭(くさ)い。」と云いながら、森へ入って行って、「さあ粟返せ。粟返せ。」とどなりました。

すると森の奥から、まっくろな手の長い大きな大きな男が出て来て、まるでさけるような声で云いました。

「何だと。おれをぬすとだと。そう云うやつは、みんなたたき潰(つぶ)してやるぞ。ぜんたい何の証拠(しょうこ)があるんだ。」

「証人がある。証人がある。」とみんなはこたえました。

「誰（たれ）だ。畜生（ちくしょう）、そんなこと云うやつは誰だ。」と盗森は咆（ほ）えました。

「黒坂森だ。」と、みんなも負けずに叫びました。

「あいつの云うことはてんであてにならん。ならん。ならん。ならんぞ。畜生。」と盗森はどなりました。

みんなももっともだと思ったり、恐（おそ）ろしくなったりしてお互（たがい）に顔を見合せて逃げ出そうとしました。

すると俄（にわか）に頭の上で、

「いやいや、それはならん。」というはっきりした厳（おごそ）かな声がしました。

見るとそれは、銀の冠（かんむり）をかぶった岩手山でした。

盗森の黒い男は、頭をかかえて地に倒(たお)れました。
　岩手山はしずかに云いました。
「ぬすとはたしかに盗森に相違(そうい)ない。おれはあけがた、東の空のひかりと、西の月のあかりとで、たしかにそれを見届けた。しかしみんなももう帰ってよかろう。粟(あわ)はきっと返させよう。だから悪く思わんで置け。一体盗森は、じぶんで粟餅(あわもち)をこさえて見たくてたまらなかったのだ。それで粟も盗んで来たのだ。はっはっは。」
　そして岩手山は、またすましてそらを向きました。男はもうその辺に見えませんでした。

みんなはあっけにとられてがやがや家(うち)に帰って見ましたら、粟はちゃんと納屋に戻(もど)っていました。そこでみんなは、笑って粟もちをこしらえて、四(よ)つの森に持って行きました。

　中でもぬすと森には、いちばんたくさん持って行きました。その代り少し砂がはいっていたそうですが、それはどうも仕方なかったことでしょう。

　さてそれから森もすっかりみんなの友だちでした。そして毎年(まいねん)、冬のはじめにはきっと粟餅を貰(もら)いました。

　しかしその粟餅も、時節がら、ずいぶん小さくなったが、これもどうも仕方がないと、黒坂森のまん中の

まっくろな巨きな巌がおしまいに云っていました。

底本：「注文の多い料理店」新潮文庫、新潮社
　　１９９０（平成２）年５月25日発行
　　１９９７（平成９）年５月10日17刷
初出：「イーハトヴ童話　注文の多い料理店」盛岡市杜陵出版部・東京光原社
　　１９２４（大正13）年12月１日
入力：土屋隆
校正：noriko saito
２００５年１月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。